

二階席から観る大相撲

長谷川 修

「大相撲五月場所の四日目の切符が余っている。二階の椅子席だが行きませんか」と、娘から誘われた。このところ大相撲は専らテレビ観戦のみで国技館にはご無沙汰だったが、二階席から観るのはどんなものかと、両国に向かった。

五月場所は、四場所連続休場明けの横綱照ノ富士、カド番大関の貴景勝、元気な四人の関脇、再入幕の朝乃山、若手の台頭等で見所は多い。またここ三年間の場所はコロナの影響で、観客人数の制限や客席での会話や食事の禁止、掛け声の禁止等、上品で窮屈なものだった。制約は徐々に解かれ、五月場所はほぼ全面解除で賑やかになっている筈だ。

幕内力士と横綱の土俵入りに合わせ三時過ぎに国技館に入った。既に両国駅や入場ゲートから込み合っており、中に入ると通路も売店も一杯の人で、「中入後」には「満員御礼」の垂れ幕が降りた。

娘が用意した席は「向正面」二階の最後列から数えて二列目で、土俵からは一番遠く、ほとんど天井に近い。二階からの観戦は初めてだったが、それでも力士たちの体が大きいからかよく見え、仕切りを繰り返すうちに体が紅潮するのが分かり、最初の体がぶつかる音も聞こえる。(ただ、「物言い」だけは、画面に映すわけでもなくよく分からなかった。)

二〇年程前に接待を受け「枳席」に二、三人で相撲見物をしたことはあるが、膝を折り飲食をしながらの観戦は、狭くて窮屈だった。今回は自腹で椅子席だったが、広くて足が伸ばせ、ビールと名物の焼き鳥もゆったりだ。

すぐ近くの席には、三年間のブランクにもかかわらず、良く通る大きい声で掛け声をかけている人がいる。掛け声には、間髪をおかず相手側力士に声を挙げる人もありで賑やかだ。丁度、歌舞伎座の大向うやオペラハウスの天井桟敷に思いを馳せた。また、二階席には、外国人のグループや若い女性のグループ、修学旅行生と多彩な客がいて、それぞれに楽しんでいた。

スポーツ観戦はライブに限る、また二階席に来ようと思った。